

# 授業研究を実践的に行う教職科目『授業分析論』受講学生の 授業観・教師観の分析

Analysis of Conceptions of Lessons and Teachers by Students  
of the Subject 'Introduction of Lesson Study' at University of Yamanashi

成 田 雅 博\*  
NARITA Masahiro

**要約：**附属小学校・附属中学校における教育実習生の研究授業のビデオ映像や学習指導ビデオ映像や学習指導案，教材等を対象に，4～5人のグループごとに授業分析を行い，授業カンファラスを行う教職科目「授業分析論」の授業開始直後及び授業終了直後に，同じ質問をつかい学生の授業観・教師観の変容を分析した結果，終了時の方が，記述量が増え，質的にも，授業における教授方略や授業技術，教育方法について具体的にイメージできるようになる受講生が多いことが示唆された。

**キーワード：**教職科目，授業研究，授業分析，大学教育，授業観，教師観

## I はじめに

山梨大学においては，2006（平成18）年度入学生より，地域密着型教員養成のあり方を再検討した上で，教員育成カリキュラムの抜本的な改革を行った。その改革の主なものは，「①少人数クラスでの一貫した指導体制の構築，②教育ボランティアの推進，③これらを統括・指導する「授業臨床部会」の新設，④地域の教育関係者で構成される「教育研究協議会」の拡充・深化」にある（寺崎，2009）。その当時の授業臨床部会運営委員長の寺崎氏は，教職に関する基礎的な実践的力量形成のため，教職科目の基幹となる以下の授業科目群を少人数グループワーク型の指導とすることとしたと述べている。そのために，数名の教員が協同で一つの科目を担当し，20名程度のクラスを分担することにより実現され，現在に至っている。

より具体的には，教職基幹科目において以下の科目を開設している（寺崎，2011）。

- ・ 1年後期 教育の現在（教育原理を含む。）（4単位）
- ・ 2年前期 教育課程臨床論（2単位）
- ・ 2年後期 授業分析論（教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。））（2単位）
- ・ 3年前期 授業設計論（事前指導）（1単位）
- ・ 3年集中 授業実践論（事後指導）（1単位）
- ・ 4年後期 教職実践演習（1単位）

## II 教職科目「授業分析論」の概要

本論文で扱う教職科目「授業分析論」は，上記教職基幹科目のうち，教員養成課程学生が初めて，授業を設計・実施・分析・評価する教育者としての立場にたつ2年次後期の科目である。

\*教育支援科学講座・附属教育実践総合センター

以下に、平成29年度の「授業分析論」シラバスの概要を示す。

- 担当教員 成田雅博／田中武夫／志村結美／佐藤博／新野貴則（学部における委員選出の母体となる5ブロックのそれぞれのブロックから選出された1名ずつの教員・年度によって異なる担当教員になる可能性はあるが、現在はかなり固定されてきている）
- 履修年次・開講学期・曜日・時限 2年・後期・金・I
- 単位数 2
- 授業の目的および概要 4人程度のグループごとに、附属幼稚園・小学校・中学校における教育実習生の研究授業のビデオ映像や学習指導案、教材等を対象に授業分析を行う。8グループ程度が出席するクラスごとに授業研究カンファランスを行い、グループによる発表、クラス内での意見交換を行う。さらに、すべてのクラスが一同に会し、全体授業研究カンファランスを行う。同一授業を分析したグループによる異なる授業分析結果の比較やディスカッションをとおして、授業を見る目を養い授業分析の技法を修得する。
- 到達目標
  - ・授業改善の方法に関する知識を修得する。
  - ・初歩的な授業分析に必要な技法を修得し、あわせて教育の方法及び技術および教材開発・評価に関する実践的力量的形成をうながす。
  - ・授業を記述し、他者に伝える能力を育成する。
- 授業の方法
  - ・最初の2回は講義を行う。
  - ・次の11回は5クラスに分かれ、クラス内で4人程度のグループで授業分析作業やクラス内授業カンファランスを行う。
  - ・最後の2回は、5クラス合同で全体授業カンファランスを行い、同一授業を分析した他のグループを中心に意見交換・討論を行う。
- 成績評価の方法  
評価項目／割合／評価の観点
  - 1 小テスト・レポート／30％／授業記述力・授業分析力
  - 2 受講態度／40％／授業分析作業およびカンファランスのための資料準備への貢献
  - 3 発表・表現等／30％／PowerPointスライド等の資料の表現力・発表における表現力・質疑応答の適切性
- 受講に際して・学生へのメッセージ
  - 1. この科目の履修申告・受講のための要件は以下のとおりである。
    - ・前期の「教育課程臨床論」を単位取得しているか、後期の「教育課程と学力形成」を履修申告すること。
  - 2. 「授業分析論」では欠席が多いと単位修得できないし、授業の目標を達成することも困難になる。
- テキスト 稲垣忠彦・佐藤学，授業研究入門，岩波書店，ISBN:4000039482
- 授業計画の概要
  - 第1回：授業の概要・グループメンバー及び分析対象授業の決定・e-Learningの使い方
  - 第2回：授業記録・授業分析・授業研究概論（講義）
  - 第3回：授業ビデオの分析方法・授業分析の視点・教材の活用の実際（講義）
  - 第4回：授業ビデオ全体視聴による授業分析の視点の抽出（演習）
  - 第5回：授業カンファランス発表資料（PowerPointスライド）のアウトラインの作成（演習）

- 第6回：授業カンファランス発表資料（PowerPointスライド）の各スライドの作成（演習）
- 第7回：授業カンファランス発表資料（PowerPointスライド）の修正・仕上げ（演習）
- 第8回：授業カンファランスで発表する授業場面の抽出（演習）
- 第9回：授業カンファランスで発表する授業ビデオクリップの編集（演習）
- 第10回：クラスごとの授業研究カンファランス（グループ1～3による発表・意見交換）
- 第11回：クラスごと授業研究カンファランス（グループ4～6による発表・意見交換）
- 第12回：クラスごと授業研究カンファランス（グループ7～8による発表・意見交換）及びクラスごとのカンファランスに関する振り返り・クラスごとの活動のまとめ
- 第13回：5クラス合同の全体授業研究カンファランス（1組～3組による発表・意見交換）
- 第14回：5クラス合同の授業研究カンファランス（4組～5組）による発表・意見交換）全体カンファランスに関する振り返り
- 第15回：総括的評価

この科目の概要を最初に設計したのは、故中村享史教授・元教育人間科学部長であり、筆者がこの科目の基本構想を初めてみたのは、2007年1月24日開催の授業臨床部会運営委員会においてであった。そのときの構想では附属幼稚園における保育も分析し、幼稚園、小学校、中学校の保育・授業分析の結果を、クラスの中で行う授業カンファランスを行うものとされていたが、3校園での保育・授業ビデオ撮影等の労力等がかかりすぎるため、現在は、小学校・中学校の授業分析のみとして実施されたが、それ以外は中村氏が設計した基本線がそのまま踏襲されている。

### Ⅲ 受講生のレポート記述

平成28年度の「授業分析論」受講者の授業観・教師観の一端を垣間見ることができる資料として、後期授業開始直後の2016年10月21日（金）締切の第1回レポートと、後期授業終了直後の2017年2月10日（金）締切の最終レポートの一部を分析する。

授業開始直後には、以下の質問で受講生に自由記述させている。

- 質問1 これまでに受けた授業のうち、よかった、おもしろかった、ためになったというものについて、校種、学年、教科、教育方法、先生のことなど自由に書いてください。できるだけたくさんお願いします。大学での授業も含めてお願いします。〈主語を書いてくださいね〉
- 質問2 これまでに受けた授業のうち、よくなかった、つまらなかったというものについて、自由に書いてください。できるだけたくさんお願いします。〈主語を書いてください〉
- 質問3 自分が授業を設計・実施する立場になったとき、どのようなことを心がけますか？どんなことをしてみたいですか？自由に書いてください。できるだけたくさんお願いします。〈主語をきちんと書いてください〉

また、授業終了直後には、上記の質問3と全く同じ質問も受講生に自由記述させている。

### Ⅳ 授業観・教師観の変容

質問3に関しては、以下のように、開始直後にやや抽象的、観念的であったり、簡素な表現であった授業観が、終了直後には具体的で、自分やほかのグループが授業分析した考察をふまえた詳細な記述へと、変容が見られる学生が多かった。

・男子学生A

(開始直後) 私は、生徒がやる気をもって取り組むような授業をしたいです。特にテストの点数に加算という方式は、私自身やる気が持てて取り組んでいるので、そのような工夫を取り入れたい。

(終了直後) 私が今回の授業を通して気を付けようと思ったことは、安全面への配慮だ。特に、私の場合は体育を専攻している。今回は、英語の授業で安全への配慮が足りないという問題点が出た。おそらく、目隠しという考えは先生なりの工夫ではなかったのかと思った。工夫を取り入れることは非常に良いことではあるが、そこには考えられない危険があるのかもしれないと感じた。今後指導案を作成する際には、本当に危険はないのかと安全面には十分に配慮したい。また、印象に残っているのは図画工作の授業だ。先生は指示をしていたが、児童はあまり聞いていなかった。表情が怖かったや、言葉が否定的になっていたという意見もあった。そこで私は、児童と一緒に活用するという授業をやってみたいと感じた。視線を一緒にすることで、児童も素直に意見を聞いてくれるのではないかと考えた。

・女子学生B

(開始直後) 子どもたちの実態に合わせて、授業内容や時間配分を検討することが重要だと思う。私は子どもたちの学びを一つ一つ蓄積していけるような授業を設計していきたい。また、自分が設計した授業を実際行ったときに、子どもたちの状況に応じて柔軟に授業内容を変更できるようにしたい。そのために、子どもたちの様子の変化を敏感に察知する能力や、授業内容を即興的に変更するための柔軟性や判断力が必要だ。私はこれらの力を身につけたいと思う。

さらに、授業で話す内容の筋道を立てておくことも重要だ。教師の話す内容に筋道が通っていないと、授業を受けている子どもたちは混乱してしまう。また、無駄な感嘆詞を取り除き、スッキリとした口調で話すことも重要だと思う。

(終了直後) 私は、実際に授業分析をしたり、いろいろなグループの発表を聞いたりして、授業の目標・ねらいの重要性を感じた。授業を通して子どもたちにどのような力を身に付けさせたいか、どんなことができるようになってほしいか、ということを第一に考え、そこから扱う教材や授業の展開について考えることが重要だと気付いた。目標をしっかりと立てれば、その目標を達成するためにどのような授業にすればよいのか、道筋が見えてくるはずだ。

また、授業の実践においては、発問のしかたが非常に重要だと気付いた。授業が盛り上がっていても、教師が子どもたちに意味が伝わりにくい発問をすると、授業の雰囲気は一変してしまう。発問する際の言葉の選び方や発問するタイミングが適切かどうか、子どもたちの実態や授業の雰囲気に合わせて、教師はよく考えなければならないと感じた。

・男子学生C

(開始直後) 私は楽しい授業を作りたいと考えます。知る喜びや目標を達成する喜びを通して、楽しい勉強の出来る授業を提供するのはもちろんのこと勉強そのものを楽しいと思えるような授業を作りたいです。

(終了直後) 私が授業をするとしたら、まず生徒・児童の実態に寄り添うということを第一に考えていきたいと思う。これまで何度か指導案を作り模擬授業を行ってきた、なんとなく自分の思い通りにいくような生徒児童を想像して作っていたように思う。しかし今回の授業分析論や観察実習を通して子どもたちの指導案で予想していたのとは違った、もしくは予想以上の反応を目の当たりにして、指導案の内容ありきでそこに子どもたちを落とし込むということでは到底良い授業は作れないのだと実感した。なので生徒・児童をよく観察し彼らに寄り添って授業を作っていくことを心掛

けていきたいと思う。

・女子学生D

(開始直後) 生徒が興味を持って主体的に取り組むことができる授業。

(終了直後) 授業によって異なるが、私は分析した道徳の授業では、児童に考えさせたいことをしっかり伝え、そこはぶれないようにしながら、答えは誘導したり、決めつけたりしないということを心掛けることが大切だと思った。正解がない授業は児童にとっても教師にとっても難しいし、評価を行うのも難しいと思った。教師の声掛け一つ一つが重要になってくると思った。

また、英語の授業で行われていたブラインドナビゲーションのように児童が楽しみながら、興味関心を持って主体的に取り組めるような活動はとても良いと思った。そのような活動では、図画工作の発表でもあったように、授業者と児童との関わりをしっかりと作っていくことが必要だと思った。

## V 結論と今後の課題

本論文においては、授業観・教師観に関するレポートの一部のみを分析した。その結果、授業分析を実践的に行い、クラス内授業カンファランスで6～8グループによる授業分析、全体授業カンファランスで5グループの授業分析をきき、ほかの参加者による質問や、コメント等の多様な授業の見方を共有することにより、受講学生はより多様で深い授業観をもち、主体的に教師として歩んでいく方向性をもつ傾向があることが見てとれた。今後は、授業分析論の成績やGPA等の科目全体の成績と授業観等の変容との関連を考察したり、レポートの記述にテキストマイニングによる分析を行い学生の授業観・教師観の特徴を抽出し、経年変化があるかどうかなどの分析をしたりすることが課題となる。また、2006(平成18)年度入学生より実施してきた少人数グループワーク型のほかの教職基幹科目と授業分析論が、授業観・教師観の変容にどのように影響しているのかの分析も課題となる。

### 謝辞

本研究においては、平成28年度『授業分析論』受講学生のレポートを引用・分析した。関係諸氏に感謝申し上げます。

### 参考文献

- 稲垣忠彦・佐藤学(1996). 授業研究入門(子どもと教育). 岩波書店
- 寺崎弘昭(2009). 教員養成プログラム改革の現状と授業臨床部会. 山梨大学教育人間科学部附属教育実践研究指導センター センターニュース No.17. pp.3-4. Retrieved from [http://www.cer.yamanashi.ac.jp/web\\_up\\_file/ar/ar17.pdf](http://www.cer.yamanashi.ac.jp/web_up_file/ar/ar17.pdf) (2017年10月27日)
- 寺崎弘昭(2011). 質の高い新人教員を育て上げるための地域協同を. 山梨大学教育人間科学部附属教育実践研究指導センター センターニュース No.19. pp.1-3. Retrieved from [http://www.cer.yamanashi.ac.jp/web\\_up\\_file/ar/ar19.pdf](http://www.cer.yamanashi.ac.jp/web_up_file/ar/ar19.pdf) (2017年10月27日)